

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成25年10月 29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学大学院文学研究科

職名・学年 博士課程3年

氏名 満原 健

助成の種類	平成23年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成		
研究課題名	現象学と京都学派の哲学		
受入機関	ウィーン大学		
渡航期間	平成24年 5月 8日 ～ 平成25年10月15日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無		
会計報告	交付を受けた助成金額	2,500,000円	
	使用した助成金額	2,500,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	渡航費	200,000円
		滞在費	2,300,000円

成果の概要／満原健

報告者は研究課題「現象学と京都学派の哲学」が在外研究長期助成に採択されたことを受け、2012年5月から2013年10月までオーストリア・ウィーン大学に所属し、ゲオルグ・シュテンガー教授の下で研究を行った。以下でその成果を三点に分けて報告する。

成果① 論文の執筆

報告者は現象学から京都学派への影響と両者の共通点、相違点を論じ、それを通して京都学派の哲学の意義を明らかにすべく、現象学の創始者であるフッサールと京都学派の中心人物である西田幾多郎の哲学について研究をすすめた。具体的には、1911年から1917年の間に書かれたさまざまな論文や講演に注目した。この時期に西田はフッサールの著作を知り、その哲学的功績の評価を定めようとしているからである。実際、この時期の西田はフッサールの哲学を称賛すると同時に批判している。例えば1915年に書かれた田辺元宛の書簡では、フッサールの『論理学研究』という著作を高く評価しているが、その数ヶ月後に同じく田辺に送られた書簡では、現象学に満足すべきでないと述べられている。また1916年になされた講演「現代に於ける理想主義の哲学」では、西田の純粹経験の立場と現象学とを同一視する記述がある。しかしこの1917年以降は、西田がフッサールに言及することすらほとんどなくなっていく。フッサールの哲学に対する西田の立場を明らかにするには、1911年から1917年にかけての西田の論文や講演が最も重要な手がかりとなるのである。そこで報告者は、上に挙げた論文・講演や、フッサールへの言及が比較的多く見られる『自覚に於ける直観と反省』（1913年から1917年にかけて執筆）という西田の著作を中心として、フッサールの哲学について西田が同意した点と批判した点、その同意と批判の根拠を明らかにした。さらにその内容を英語で一つの論文としてまとめた上で、去年創刊された *Journal of Japanese Philosophy* という雑誌に投稿した。なおこの研究をすすめるにあたって、シュテンガー教授から同じテーマでごく近年行われた学術会議の発表原稿を頂くことができ、また複数の重要な論文の存在を教えられたため、これらを論文執筆に役立てることができた。

成果② 間文化哲学についての知見の獲得

間文化哲学という名の下で行われている哲学運動は、哲学をヨーロッパ及びアメリカの哲学に限定する見解をヨーロッパ中心主義として批判し、ヨーロッパとアメリカの外部でなされてきた思索をも考察の対象とすることで、新たな哲学を生み出すことを目指している。この哲学運動は主にドイツ語圏で徐々に盛んとなってきたものの、日本ではまだほとんど受け入れられていない。シュテンガー教授はこの間文化哲学の第一人者であり、またウィーン大学は間文化哲学の最大の研究拠点であるため、参加した講義や学会から、日本では得られない様々な知見を獲得することができた。これは海外研究の当初の目的ではなかったが、今後

京都学派の哲学の研究をすすめる上できわめて有益であると考えている。現在京都学派の研究として、ヨーロッパ哲学に対する西田幾多郎らの哲学の意義が論じられることが多い（報告者の研究もこの部類に属する）が、間文化哲学はこのような議論だけでは哲学として不十分だと主張するからである。この類の議論の問題点として間文化哲学が指摘するのは、特定の文化から生じてきた哲学は、その文化内でしか受け入れられない特殊な思想内容を、あたかも普遍的で万人に受け入れられるべきものであるかのように語る危険性をはらんでいる、ということである。この危険性から逃れるためには、ある哲学の独自性を単に示すだけでなく、他の複数の文化で培われてきた思想と対比を行い、異なる思索がありえないのかどうか、他の文化においてもその哲学が正当なものとして受け入れられるのかどうか検討する必要がある。京都学派の哲学についてこのような観点からなされた研究はあまりにも少ないと言わざるを得ない。これは報告者を含め、京都学派の哲学を研究する者の今後の大きな課題となるであろう。

成果③ 文献の入手

フッサールは生前に膨大な量の原稿を書いたが、その多くはまだ出版されておらず、ベルギーのルーヴァン大学にあるフッサール文庫に保管されている。今回は財団から頂いた海外研究の資金が豊富であったため、ウィーンを離れてこのフッサール文庫を訪れ、出版されていない遺稿の一部を参照し、パソコンに保存することができた。これらの遺稿の詳細な検討はまだ行っていないが、今後の研究に役立つと考えられる。

また、上にも述べたように間文化哲学はまだほとんど日本に受容されていないため、これに関する文献は重要なものですら日本では入手不可能である。それに対してウィーン大学は間文化哲学の最大の拠点であるため、多くの文献を参照し、一部を日本に持ち帰ることができた。これらの文献も今後の研究のために用いていく予定である。